幸せな明日のために

「あなたにとって、幸せって何ですか？」と問われたら、皆さんはどのように答えますか。「健康であること」「美味しいものを食べること」「好きなことに時間を使うこと」「誰かのために役立つこと」など、幸せの形は人それぞれでしょう。ただ、それを一瞬で壊してしまうものがあります。その一つが戦争です。

今年は、第二次世界大戦が終結して81年目にあたります。過去の大戦では、人類史上最多の命が奪われました。民間人も数多く殺され、人として幸せに生きる権利が無理矢理に剥奪されました。私は、「戦争は最大の人権侵害である」と思います。

1945年８月９日の午前11時２分、長崎市で原子爆弾が炸裂し、一瞬にして７万人あまりの命が失われました。その後の放射線による影響なども含めると死者数は15万人以上に上ります。長崎市の平和記念公園の北に、「如己堂（にょこどう）」（“己の如く人を愛せよ”という故永井隆博士の信条にもとづいた2畳一間の住居）が現在もあります。



如己堂（長崎市）

永井氏は、長崎医科大学での医療業務により被爆し、原爆投下の2ケ月前には白血病のために余命３年と診断されていました。その上に原爆により被爆したのです。しかし側頭動脈切断という重症を負いながら救護活動を行ったり、病床に伏しながら「如己堂」で執筆を続けたりして、「如己愛人」や「平和」の精神を世界に向けて訴え続けました。

「♪こよなく晴れた青空を♪」で始まる歌『長崎の鐘』は、永井氏の著書『長崎の鐘』に感銘を受けたサトウハチロー氏が作詞したもので、古関裕而氏が曲をつけ、藤山一郎氏の歌唱で広く知られました。

以下は、著書『この子を残して』の冒頭の一節です。



永井 隆 博士

うとうとしていたら、いつの間に遊びから帰ってきたのか、カヤノが
冷たいほほを私のほほにくっつけ、しばらくしてから、
「ああ、……お父さんのにおい……」
と言った。

この子を残して…この世をやがて私は去らねばならぬのか！

母のにおいを忘れたゆえ、せめて父のにおいなりとも、と恋しがり、私の眠りを見定めてこっそり近寄るおさな心のいじらしさ。戦の火に母を奪われ、父の命はようやくとりとめたものの、それさえ間もなく失わねばならぬ運命をこの子は知っているのであろうか？…

永井氏は、破壊された市の様子、死んでゆく同僚や市民の様子などを貴重な証言として克明に書き残します。その優しい文章は、戦後復興の希望となりました。

私たちは、過ちを繰り返してはいけません。病床にありながら、隣人への愛と世界平和の実現を訴えた永井氏のメッセージ、「今こそ重要なのでは」と感じます。